

十字架の道行き信心の史的概観（2）

アメデ・テータールト・ドゥ・ゼデルヘム

Aperçu historique sur la dévotion au chemin de la croix

Amédée Teetaert de Zedelgem

関根 浩子 訳

Transl. Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授

Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

(前号からの続き)

Ⅲ. 15 世紀から今日まで

A 多くの特殊な諸信心を内包した 受難に対する信心

1. 十字架の道行き信心に対する間接的影響を伴った諸信心

キリストの受難に対する同情的な信心は、すでに要約して述べたように、13、14 世紀に心の琴線に触れる悲壮主義と心を揺さぶるリアリズムを帯びた。そうした悲壮主義とリアリズムは、福音書や幾つかの外典、伝承中に見出されるか、あるいは神秘主義作家が考案した多くの受難場面の写実的な叙述中にも表現されていた。続いて巡礼者たちは、こうした場面を携えてエルサレムに赴き、同地滞在中にそれらが生じたと考えられる正確な場所を突きとめて確定しようとした。受難物語の悲壮主義とリアリズムは、時が経つにつれてさらに増大してい

た。神秘主義者たちはもはや受難の諸場面を描写するに留まらず、自らの受難の幻視のなかで、笞刑の間に救い主が受けた鞭打ちの数や、主の賞賛すべき肉体を覆った傷口や裂傷の数、被った流血の回数、流された涙の数、流された血の滴りの数、受難の間の転倒の数、最後の晩餐からカルヴァリオまでの間の痛ましい移動の数などを数えるに至った。こうした観想はいずれも、同じような特殊な信心を誕生させていた。そして後者は、特に 15 世紀の間に増大して並外れた広がりを見せた。

主要な信心のうちのひとつと言えるのは、5 つの傷に対する信心であり、これは特にフランシスコ会士が広め、やがて救い主のすべての傷に対する信心を生じさせた。この救い主のすべての傷に対する信心は、著述家によってその数が異なり、15 世紀にはとりわけ 15 回の主の祈りの信心業とともに実践されていた⁽⁹¹⁾。さらにイエスの脇腹の傷や心臓、聖血、流血、キリストの身体のもそれぞれ異なる部位、聖顔像、さまざま

まな受難具、十字架上での7つの言葉などに対する信心も挙げられる。M. メールテン⁽⁹²⁾やL. グゴ⁽⁹³⁾の著作中には、こうしたすべての信心と、それらを実践するために採用された方法についてのかなり詳細な説明が見出される。

いずれにしても我々は、たとえ影響が小さかったにせよ、十字架の道行きの誕生とそれを構成している幾つかの留に影響を与えた信心に一瞥を与えなければならない。

「ピエタに対する信心」、ないしは十字架降下後に息子の死を悼む聖母に対する信心は、このような信心の例である。心の琴線に触れるこの挿話は、シメオン・メタフラステスの『嘆きの聖母マリア (*Planctus S. Mariae*)』⁽⁹⁴⁾ (10世紀) や、ナジアンゾスの聖グレゴリウスの著作のひとつとして出版された11、ないしは12世紀の悲劇『耐え忍ぶキリスト (*Christus patiens*)』⁽⁹⁵⁾、偽アンセルムスの『主の受難についての対話 (*Dialogus de passione Domini*)』⁽⁹⁶⁾、また偽ベルナルドゥスの『キリストの受難について (*Liber de passione Christi*)』⁽⁹⁷⁾中にすでに記されているし、後年の14、15世紀には、イエスの受難についての黙想や、例えばハインリヒ・ゾイゼ⁽⁹⁸⁾や聖ビルギッタ⁽⁹⁹⁾、トマス・ア・ケンピス⁽¹⁰⁰⁾によるような『イエスの生涯』中において再び取り上げられた。後3者は、さらにピエタの崇敬方法を示すとともに、唱えるべき祈りも広めており、この受難場面はやがて十字架の道行きに移行して13番目の留となる。

次に挙げられるのは、その最古の証言が12世紀に遡るイエスの「聖顔像」、わけでもローマのサン・ピエトロ大聖堂に収蔵

されているウェロニカの薄布に対する信心である。この信心は教皇庁によって奨励され、あらゆる国々に広まった。そしてほとんどすべての教会堂のなかにウェロニカの薄布に写る救い主のイメージの複製が見出されることになる。イエスの顔を拭うウェロニカと彼女の薄布に救い主の顔の血痕が残される場面は、当初はキリストの受難といかなる関係ももっていなかったひとつの伝承の何世紀にもわたる発展の帰結といえる。救い主の受難のなかにこの場面を導入しようと努力した初期の人々のひとりにアルジャントゥイユのロベールがいるが、彼は1300年頃、我々がたった今行ったように同場面について言及している。この場面は、我々が救い主の受難と生涯についてのすべての黙想中にすみやかに取り入れられた。続いて、エルサレムにおいてキリストとウェロニカの出会いが生じた場所も示され、巡礼たちはそこでウェロニカの家があった場所を崇敬したり、どのように奇跡が生じたかを学んだりできるようになった^(101*)。ヴェローナのジャコモは、すでに1335年に自らの旅行記中に「キリストが聖顔像 (ウェロニカ)、すなわち自身の顔を与えた場所 (*locus ubi Christus dedit Veronicam, id est faciem*)」⁽¹⁰²⁾を挙げてウェロニカの場面を示唆しているが、巡礼たちがこの場面について語り始めるのは15世紀になってからのことである⁽¹⁰³⁾。しかし、C. シックは、ウェロニカの家とされた場所で再発見された石や煉瓦の壁体やテラコッタの管を、ローマ時代より前のユダヤ人の家の遺構に属するものとみなしている⁽¹⁰⁴⁾。さらに、イエスと腕に薄布をもった

ウェロニカとの出会いや、膝までチュニカを引き上げているひとりの男性を表現している白大理石の柱頭—トルコ人の兵舎（アントニア）の南東に位置するモスクの長尖塔ミナレットの東側の一対の窓に見られる一は、12世紀のものであろう^(105*)。しかしこの場面は、キリストが十字架を運んでいないところをみると、キリストの受難ではなく、むしろウェロニカの伝説に先行するひとつの解釈、おそらくはヤコブス・ア・ヴォラギネが『黄金伝説』第53章^(106*)で語っている解釈に関係しているように思われる。ウェロニカと救い主との出会いが十字架の道行きの留として認められるのはもっと後年のことである。

「聖衣を剥奪されるイエス」や「磔刑」、「十字架設置」といったその他の受難場面は、神秘主義者や民衆の特殊な信心の対象であった。多くの細部描写を伴った聖衣を剥奪されるイエスの物語は、『主の受難についての対話（*Dialogus de passione Domini*）』の第10章⁽¹⁰⁷⁾や、ザクセンのルドルフスの『イエス・キリストの生涯（*Vita Jesu Christi*）』I, II, 第63章、タウラーの『我らが救い主の生涯と受難についてのこの上なく敬虔な信心業（*De vita e passione Salvatoris nostri piissima exercitia*）』第33章⁽¹⁰⁸⁾中に記されている。さらに我らが主のこうした聖衣剥奪を崇敬するための信心業や祈りも公にされた。

「磔刑」については、造形芸術においてと同様、文学においても二重の表現が見出される。最古の伝承によれば、イエスはすでに設置されていた十字架にのぼり、続いてその上で釘を打たれたことになるであ

うし⁽¹⁰⁹⁾、それより後年の伝承によれば、イエスは十字架上に横たえられて釘を打たれたことになるであろう⁽¹¹⁰⁾。

「十字架の設置」についての最も写実的な叙述は、福者フォリーニョのアンジェラ⁽¹¹¹⁾の『生涯（*Vita*）』や聖ビルギッタの『天啓（*Revelationes*）』⁽¹¹²⁾、タウラー⁽¹¹³⁾、そして受難に対する15世紀のすべての信心書中に見出される。それらは、十字架の設置の間にキリストが被った苦しみに敬意を払うために唱えるべき祈りについても紹介している。15世紀の間のこれらすべての信心書とそれらの実践方法については、M.メールテンを参照されたい⁽¹¹⁴⁾。これらすべての受難場面は—15世紀に特殊な諸信心の対象となっていたそれらの伝説的解釈のすべてとともに—、やがて十字架の道行きに移行し、同じような留としてそこに吸収されることになる。

2. キリストの転倒に対する信心

十字架の道行きの発生に主要な影響を及ぼし、また著述家の多くがすでに十字架の道行きそのもののひとつの信心業とみなしている信心は、イエスの転倒に対する信心で、すでに15世紀に特にドイツやオランダ、ベルギーに広まったが、他の国々にはそれらの国々ほど広まらなかったか、ほとんど流布しなかった。この信心は、他方で、互いにひとつの共通要素をもっていた受難のすべての出来事を、同じ題目ないしは信心のもとに好んで統合していた、当時の感傷的で現実主義的な信仰心と完全に一致している。このようなわけで神秘主義者たちは、受難の間にキリストから流れ出た流血

の数や、同じく血の滴りの数、落涙の数、被った傷の数などを数えている。それゆえ、救い主が受難の間、特に十字架の圧倒的な重さのために何回倒れたかが問われたとしても驚くに当たらない。いずれにしても、こうしたすべての信心、例えば流血やマリアの喜びと悲しみ、キリストの転倒に対する信心において、同じ数、すなわち5か15、あるいは特に7が繰り返し現れているのは驚くべきことである。同様にキリストの転倒数は、U. ピンダー⁽¹¹⁵⁾に見られるように、時に5、時に15や32⁽¹¹⁶⁾であり、またヘント大学図書館の手稿1748のフォリオ95裏の受難物語に見られるように、時に6であることもあるが、目にする頻度が最も高いキリストの転倒数はいずれにしても7である。中世の神秘主義者たちの数字の7に対する偏愛は、K. A. クネラー⁽¹¹⁷⁾によれば、彼らがこれらの信心を聖務日課の7つの時課と関係づけていたという事実か、彼らがそれらを一週間の7つの曜日の間に割り振っていたという事実由来していると推測される。

このキリストの転倒に対する信心はひじょうに人気があり、15世紀末とその後の数世紀の間に、特に北欧の国々で大いに流布していた。各転倒がキリストの受難のあれかこれかの場面と関係していたように、こうした場面を礼拝堂か、あるいは付け柱か円柱か十字架によって想起させることや、そうした場面を彫刻や低浮彫、あるいは素描によって表現することに意が払われ、また大抵は、受難のすべての場面と場面の間、エルサレムにおいてそれらが隔てられていたのと同じ距離を置くことにも意が払

われた。

転倒において、また幾つかの転倒が関係づけられている受難の諸場面において採用されている順序は、転倒に対する信心が見出される多くの場所で少しも一致していない。むしろ、転倒の順序と受難場面の選択には、きわめて大きな多様さときわめて深遠な相違が存在していたため、それぞれの場所でそれぞれ異なった転倒が崇敬されていたと言っても過言ではない。こうした著しい多様性にもかかわらず、ともかくも明らかに際立った2つのシリーズの転倒、すなわち受難全体を包含している転倒と、ピラトの館とカルヴァリオとの間のいわゆる本来の十字架の道行きの間で出会う転倒が識別される。K. A. クネラー⁽¹¹⁸⁾によれば、前者のシリーズは最古のシリーズであり、後年になって初めて転倒は十字架を背負いながら救い主が辿った行程に限定されたと推測される。

しかし、受難全体に関係している転倒シリーズの遺例は比較的少ない。このことから、受難全体に関係するこの7回の転倒の敬虔な信心業は比較的短期間だけ実践されたということ、また、この信心業にもっと具体的な現実的性格を与えるために、7回の転倒の選択はかなり早くにピラトの館からカルヴァリオまでの間の行程に関係する出来事に限られたということが推測されよう。受難全体を包含する7回の転倒例としては、アイフェル山地のノイアーブルクの「オリーヴ園の救い主」、「大祭司の前の救い主」、「笞刑」、「荊冠」、「エッケ・ホモ」、「十字架を運ぶキリスト」、「キレネ人に助けられるキリスト」、ストラスプールのサ

ン・ウルバン墓地の「オリーブ園のイエス」、「捕縛」、「大祭司の前のイエス」、「笞刑」、「荊冠」、「キレネ人に助けられるイエス」、「エルサレムの娘たちとの出会い」、「磔刑」、アーヘンの「オリーブ園のキリスト」、「ユダによる裏切り」、「笞刑」、「荊冠」、「十字架を運ぶ」、「十字架につける」、「十字架上での死」、インスブルックの「オリーブ園のイエス」、「ケドロンの急流を越えるイエス」、「笞刑」、「ピラトの前のイエス」、「荊冠」、「十字架を運ぶイエス」、「十字架上の死」、そしてルクセンブルクの「オリーブ園の救い主」、「ユダの裏切り」、「嘲笑」、「荊冠」、「ウェロニカとの出会い」、「十字架上の死」、「十字架降下」が見出される⁽¹¹⁹⁾。転倒の例は増やそうと思えば増やせるが、転倒の順序と、上述の諸転倒がそれらの展開中に生み出されたと推測される受難の諸場面の選択にきわめて大きな多様さが存在していることを、私は若干の例を挙げて示すに留めた。

この7回の転倒シリーズは、K. A. クネラーが言及している15世紀の2つの木版画シリーズのなかに現存している⁽¹²⁰⁾。それらの転倒とは、以下の「ケドロンの急流での転倒」、「ヘロデのもとからピラトのもとへ赴く途上での転倒」、「ピラトの宮廷の階段上での転倒」、「笞刑の円柱から解かれた後の転倒」、「十字架を運んでいる最中の転倒」、「十字架上に投げられ磔にされた際の転倒」、「十字架が立てられ打ち込まれた後、倒れるに任された際の転倒」である。各版画には、心臓を剣で貫かれた悲しみの聖処女も表現されている。これらのシリーズのうちのひとつは、ストックホルムの国

立美術館に収蔵されている⁽¹²¹⁾。

これら2つのシリーズに表現されている主題は、『カルヴァリオ山 (*Berch van Calvarien*)』^(121a)と呼ばれる小信心書中に含まれている7回の転倒と照合されなければならない。この小冊子中の諸場面と版画に表現された諸場面は、おそらく2番目のものを除けば同じである。『カルヴァリオ山』中の2番目の場面では、キリストが転倒するのはヘロデのもとに赴く時であり、版画に見られるように、ヘロデのもとからピラトのもとに赴く時ではない。この小冊子の目的は、キリストの受難についての黙想に際して信徒の手助けとなり、また、救い主が十字架を運ぶのをどのようにして助けるべきかを信徒に教えることにある。このようなわけで同書には、祈りと渴望によってキリストの受難と7回の転倒に従うための敬虔な方法が見出されるのである⁽¹²²⁾。

ヘント大学図書館の手稿1734のフォリオ93裏には、この『カルヴァリオ山』中に含まれている信心業に類似したものに関する記述が現存している。この写本には、苦しむキリストに対する祈りや感謝の行為、渴望と哀願を伴った同様の諸場面が列挙されている。M. メールテン⁽¹²³⁾によれば、7回の転倒の最古の信心形態と表現形態を提供していると推測されるのはこの写本であり、K. A. クネラー⁽¹²⁴⁾やH. サーストン-A. ブディノン⁽¹²⁵⁾が主張している『カルヴァリオ山』ではない。後に再び取り上げることになるカルメル会士ヤン・パスカ⁽¹²⁶⁾は、たった今挙げた版画上に表現されたものと同じ転倒を列挙している。7回目の転倒は

時が経つにつれて変化を被る。当初は、すでに立てられていた十字架が再び地面に倒れるのが表現されていたため、イエスの顔はさらにもう一度地面にぶつかったであろうが、やがて7回目の転倒に対しては、十字架を立てるために用意された穴にそれを降ろすことによって生じたすさまじい引きを当てることが意図される⁽¹²⁷⁾。

注目すべきは、受難に先行するイエスの聖母への暇乞いから始まる7回の転倒の信心業にも出会うことで、その例はK. A. クネラーの著書⁽¹²⁸⁾に見出される。さらに、すでに指摘したように、5回の転倒⁽¹²⁹⁾しか含まない信心業もあれば、その他の信心業には7回以上の転倒を含むものもあった。転倒が崇敬されていた多くの場所に見られる転倒数やそれらの表現の多様さは、このようにして説明される。

受難全体を包含しているこの転倒シリーズと並んで、すでに15世紀末には、十字架を背負ってイエスが辿った行程に沿って7回の転倒を振り分けるシリーズが頭角を現した。この後者のシリーズは、おそらくより具体的な現実性をもっていたために、前者のシリーズよりもはるかに流布し、16世紀から18世紀までの間は、ドイツの至る所やベルギー、オランダに見出される。この信心業は、14留の十字架の道行きのきわめて重要な競合相手のひとつであった。こうした転倒のうち最も古くて最も見事な形態のひとつは、アダム・クラフトがニュルンベルクに制作した有名な浮彫シリーズ（図1、2）である。このシリーズは、一般に承認されているように、1480年から1490年までの間に制作されたものではな

く、1505年頃のものである。また知る限りでは、マルティン・ケッツェルが注文したのではなく、すでに1500年頃、同じアダム・クラフトにバンベルクの類似の彫刻シリーズを制作させていたバンベルクのハインツ・マルシャルク⁽¹³⁰⁾が注文したものである。これら2つのシリーズの各転倒に表現されている場面は、いわばまったく同じであるだけでなく、群像彫刻の主題や、各場面とピラトの館との間の距離⁽¹³¹⁾を示している各浮彫の下の銘板**に刻まれた銘文には強い類似性も認められる。

バンベルクに表現された受難の諸場面は、イエスが十字架の下でよろめくか倒れた場面を含み、「十字架を背負ってピラトの館を去る時」、「聖母に会う時」、「キレネ人が十字架を運ぶのを手助けするよう強いられる時」、「エルサレムの娘たちに語りかける時」、「ウェロニカがイエスの顔を拭う時」、「十字架の下に倒れる時」となっている。ニュルンベルクの転倒シリーズに彫り込まれたエピソードはバンベルクのものと同じであるが、違いがひとつある。ニュルンベルクのシリーズにはバンベルクのシリーズの最初の場面が欠けているが、他方でバンベルクのそれにはない2つの場面、すなわち十字架を運んでいる時にユダヤ人に打たれて手ひどい扱いを受けるキリストと、十字架から降ろされ聖母の嘆きの対象となるイエスが見出される点である。これらすべての彫刻上でキリストは、地面に伏さない場合は、少なくとも十字架の重みでよろめくように表現されるか、何とか身を起こそうとしている。

このように、当初からこの彫刻シリーズ

は「7回の転倒」という名称で民衆に知られて崇敬された。「7回の転倒」に対する信心は、16世紀から17世紀にかけてドイツに著しく広まった。ひじょうに多くの地域で崇敬され、同信心業が民衆の間にしっかり根を下ろしていたため、18世紀に14留の十字架の道行きがそれに取って代わるに際しては困難を伴うことになる。「7回の転倒」が崇敬されていたドイツの多くの地域については、K. A. クネラーを参照されたい⁽¹³²⁾。

「7回の転倒」の敬虔な信心業は、ドイツ以外、例えば、この場合本当にそれを転倒と呼べるとすれば⁽¹³⁴⁾、15世紀初めに5回の転倒シリーズも見出されるチロル⁽¹³³⁾や、アルザス⁽¹³⁵⁾やオーストリア、オランダの例えばワーヘニンゲンやエルブルフ⁽¹³⁶⁾などで、また、ベルギーの例えば7回の転倒が小さき兄弟会の修道院の庭⁽¹³⁷⁾に表現されていたアントウェルペンや、おそらくその他の土地でも実践された。しかし、1505年頃に建設されたルーヴェンの十字架の道行きは、「7回の転倒」には関係しておらず、どちらかと言えばピラトの館からカルヴァリオへ至る行程上の主要な受難場面を再現しているように思われる。同じことは、フランスやフリブール（スイス）に16世紀から17世紀にかけて建設された、後述するいわゆる十字架の道行きにも当てはまる。後者は実際すでに真の十字架の道行きに似ており、言わばその初期の形態を成している。というのも、そこには十字架の道行き信心の構成要素であるピラトの館からカルヴァリオまでキリストが十字架を負って辿った道の上を、その苦悩に靈的に

合一しながら同伴することが見出されるからである。

受難全体の上に割り振られた7回の転倒についてと同様に、ピラトの館からカルヴァリオまでの間のイエスが辿った行程だけを包含している転倒についても、転倒の記載に同じ順序が観察されなかつただけでなく、幾つかの転倒が関係づけられている受難の諸場面の表現にはきわめて大きな多様性が見出されることもあった。従って、同一と言えるような「7回の転倒」の信心業が2つ見出されることは稀である。要するに、最初の転倒シリーズについては、2番目のシリーズについてと同様に、キリスト教徒に「7回の転倒」の信心業の実践方法や、ピラトの館からカルヴァリオまでの道の上を7回転倒してキリストに同伴する方法を教えるささやかな信心書群が存在していたのである。その例としてK. A. クネラー⁽¹³⁸⁾は、1710年にケルンで刊行され、特に書中に「ピラトの館からカルヴァリオまで十字架を運んだ際、キリストが行った7回の転倒を崇敬すべき敬虔な方法（*Eine andächtige Weiss, zu verehren die sieben Fussfäll Christi, die er getan hat, als er sei Kreuz getragen aus dem Hof Pilati bis zum Berg Calvariä*）」⁽¹³⁹⁾を含んでいる一冊の信心書を挙げている。この信心書自体のタイトルは『ケルン人の新ローマ巡礼（*Newe Cöllnische Römerfahrt*）』であり、著者はフランシスコ会士である。そこには各転倒間の距離も示されている。この7回の転倒は、以下の受難のエピソード、すなわち「イエスが十字架を負わされた場所から80歩の所における最初の転倒」、「（さらに60歩進み）聖母と出会う所での

2回目の転倒」、「そこから71歩進んだ場所
でイエスが十字架を運ぶのをキレネ人が
助ける時の3回目の転倒」、「(さらに191
歩進み) ウェロニカがイエスの聖顔を拭う
際の4回目の転倒」、「(336歩進んだ後)
裁判の門の所で起きる5回目の転倒」、
「(348歩進んだ後で) エルサレムの娘た
ちと出会う時の6回目の転倒」、「(そこ
から161歩進んだ) カルヴァリオの麓での7
回目の転倒」に関係している。カプチン会
士コヘムのマルティン(1712年没)の著
書『広い没葉の園 (*Grosser Myrrhengarten*)』
⁽¹⁴⁰⁾や、Gr. リッベルの著書『カトリック教
会におけるすべての儀式や慣例、慣習の古
代性や源泉、解釈 (*Altertum, Ursprung und
Auslegung aller Zeremonien, Gebräuche und
Gewohnheiten der Katholischen Kirche*)』
⁽¹⁴¹⁾には、これらと同じ転倒が見出される。

こうしたすべてのことから、受難全体を
含む「7回の転倒」の敬虔な信心業だけ
ではなく、十字架を負ったキリストが通
った部分にのみ関係している「7回の転
倒」の信心業も、本来のいわゆる十字
架の道行きの信心業に似ており、多
くの点で後者との類似を示している
とはいえ、本来の十字架の道行き
とは著しく異なり、いずれにしても、
いわゆる本来の一形態というよりは
先駆的形態とみなされることは明
らかであるように思われる。

3. 十字架の道行きに対して直接的な影響 を及ぼした諸信心

a. キリストの苦しみの歩みに対する信心
ドイツにおいてきわめて人気があり、7

回の転倒の信心と同時代のものである信心
に、救い主が受難の間にそうすることを余
儀なくされた苦しみの移動に対する信心が
ある。一方で受難の最中か十字架を運ん
でいた間にキリストが行った多くの転倒を
数え、崇敬することに関心がもたれてい
たのであれば、他方ではイエスとその痛
ましい受難の間にそうすることを余儀なく
された多くの移動を数えることにも関心
がもたれていたのである。K. A. クネラー⁽¹⁴²⁾
によれば、ドイツ人は、他の国々では
そうされていたように、キリストが立
ち止まった多くの場所、言い換えれば
多くの留について考察するよりも、あ
る場所から別の場所へとやつのこと
で歩いていく救い主が表現される方
を好んでいた。それゆえドイツでは、
キリストの苦しみの移動は他の国々の
十字架の道行きの留と一致していた。
しかしドイツ人は、ある場所から別
の場所への移動の間に救い主が直面
した苦しみについて黙想したり同情
したりすることでは満足せず、その
移動の開始場所と到着場所において
救い主が耐えていた苦しみを黙想し、
それらの苦しみをきわめて感傷的な
リアリズムで描写していたので、民
衆はイエスの苦しみを完全に共有し、
心から霊的に救い主と合一していた。
説教師たちは、救い主が、その多
くの苦しみの移動、とりわけピラト
の館からカルヴァリオまでのきわ
めて困難で嫌悪を催させる行程にお
いて耐えた暴行や傷、拷問、責め
苦、苦悩をひじょうに生き生きとし
た調子で描き出そうとしていた⁽¹⁴³⁾。
彼らは、民衆もまたキリストの苦し
みを黙想したり考察したりするだけ
で満足せずに、その苦しみの行程
においてキリス

トの苦しみに同情し、それらを共有してキリストと合一するよう強いていた。その結果、移動に対する信心業、とりわけピラトの所からカルヴァリオ山までのキリストの移動に対する信心業と、十字架の道行きの信心業との間には、驚くべき類似ときわめて緊密な関係が存在していることになる。

しかし、崇敬された移動の数は至る所同じというわけではなく、ここにも転倒の場合と同様に、行程の選択にしる、それらが配される順序にしる、きわめて大きな多様性が認められる。こうして、幾つかは移動について9回を数え、その他は12回、さらにその他は15回か大体は大きな別の数を数えているが、多くは7回と9回に止めたように思われる⁽¹⁴⁴⁾。この信心の当初の形態は、聖金曜日にキリストの苦しみの移動を記念して、7つ、ないしは9つの教会堂を訪問することから成っていた。ザクセンのルドルフス（1377年没）は、すでにこの敬虔な伝統についての認識を示している⁽¹⁴⁵⁾。ガブリエル・ビール（1495年没）は、信徒が教会堂を10堂訪問してキリストの10回の苦しみの移動、すなわち「ユダの裏切りや捕縛、ケドロンの転倒、頬の平手打ちを伴うオリーヴ園からアンナの館までの移動」、「あらゆる種類の虐待や聖ペテロの否認、偽証、宣告、嘲笑を伴うアンナの館からカイアフアの館までの移動」、「律法学者らの会議の面前での再度の移動」、「偽りの告発を伴うカイアフアの館からピラトの館までの移動」、「新しい告発を伴うピラトの館からヘロデの館までの移動」、「イエスよりもバラバの方が好まれた場面を伴うヘロデの館から白い服を着たピ

ラトの館までの移動」、「笞刑の執行所へイエスが連行される時の移動」、「ピラトの館からエッケ・ホモの場所までの移動」、「宣告の場所へ移る時の移動」、「カルヴァリオの道を十字架の重みでよろめきながら歩く磔刑を伴った移動」を崇敬していると述べている⁽¹⁴⁶⁾。バーゼルの説教師ギヨーム・テクスター⁽¹⁴⁷⁾の著書には同じ歩みが見出される。

16世紀初めに、U. ピンダーは、捕縛後にキリストが行った9回の移動を記念して、信徒が聖金曜日に9つの教会堂を訪問していたと述べている⁽¹⁴⁸⁾。これらの移動はG. ビールが記している移動と一致しているが、3番目が欠け、嘲笑を5番目の移動に、荊冠を6番目の移動に当てている点が異なっている。バンベルクの付属教区長であったJ. フォイヒトは1574年に小冊子を出版し、その中で信徒に、キリストの9回の移動を、同数の教会堂もしくは祭壇を訪問するか、教会に行けない場合は祭壇の前か家の中か他の場所で、同じ回数だけ跪きながら、聖金曜日にだけではなく、一年のすべての金曜日か、時間が許す別の日に崇敬する方法を教えている⁽¹⁴⁹⁾。列挙されている移動はU. ピンダーが挙げたものと同じである⁽¹⁵⁰⁾。そこには、各移動に当てはめられた信心業と祈りが見出される。

他の著述家は、1566年の手書きの祈祷書からわかるように⁽¹⁵¹⁾、キリストの9回の移動を、聖金曜日に受難の歌の後で司祭によって行われる9回の集会祈願か祈りと関連づけている。これらの移動は、J. フォイヒトが挙げた移動に一致しているが、フォイヒトの6番目（荊冠の場所へ赴くキ

リスト) が欠け、2 番目と 3 番目との間に、自身を告訴し咎める民衆の前に導かれた際イエスが行った移動が挿入されている点が異なっている。個々の行程ごとに、記念された受難のエピソードに適用された祈りが見出される。

キリストの移動を記念して7つか9つの教会堂を訪問するという習慣は、おそらくローマのバシリカ群の訪問を模倣したものである⁽¹⁵²⁾。というのも、中世にはローマでもしばしば9つの教会堂の訪問が行われていたからである。聖フィリッポ・ネーリ(1595年没)に遡ると思われる慣例に従って、人々は、16世紀初めにG. ペパン(1532年没)によって列挙されたイエスの7回の苦しみの移動、すなわち「オリヴァ園への移動」、「アンナの館への移動」、「カイアファの館への移動」、「ピラトの法廷への移動」、「ヘロデの館への移動」、「再びピラトの法廷への移動」、「カルヴァリオ山への移動」を記念して、7大バシリカを訪問していた⁽¹⁵³⁾。しかし、受難の諸場面のほか下に大聖堂群を描いていたK. A. クネラー⁽¹⁵⁴⁾が挙げた2つの聖画像シリーズからわかるように、ローマの大聖堂群はすでに聖フィリッポ・ネーリよりはるか前に救い主の受難と関連づけられていた。

キリストの苦しみの移動を崇敬する方法には、教会堂に通じる道に受難柱を建てるという方法もあった。円柱の数は人々が記念していた移動の数によって異なっていた。N. パウルスは、1520年頃に南ドイツで編まれた、書中で受難柱の建て方を教えている指南書を挙げている。同書に記されている受難柱は11である。最初の円柱は出発

点であってキリストのいかなる移動とも対応しておらず、その後「エッケ・ホモの場面」、「ピラトの館での死刑宣告の場面」、「十字架を負うイエスの場面」、「最初の転倒の場面」、「エルサレムの門への到着とエルサレムの娘たちとの出会いの場面」、「二度目の転倒の場面」、「カルヴァリオ上の場面」、「聖衣を剥奪され十字架が準備されるまで牢屋に入れられるイエスの場面」、「磔刑の場面」、「十字架降下の場面」、「埋葬の場面」⁽¹⁵⁵⁾が続いている。おそらく1499年にアントウェルペンで印刷されたフランドルの小受難書でも、同じような信心業に対する示唆は明瞭である。同書は、「これは我らの主イエスがピラトの館からカルヴァリオの丘まで重い十字架を背負いながら辿った13の場所(留)から成る道行きである(*Dit is die ganck die ons herer Ihesus ghinck wt pilatus huse geladen metten swaren cruce tot opten berch van calvarien ende sijn geordineert met XIII punten*)」で始まっている。この著者は、信徒に、教会に行く際には救い主がピラトの館からカルヴァリオまで進んだ時の苦しみの行程を黙想するよう勧め、また、「ピラトによるイエスの死刑宣告」、「聖母との出会い」、「キレネ人が十字架を運ぶのを助ける」、「エルサレムの娘たちとの出会い」、「ユダヤ人に嘲笑され虐待されてイエスがどのようにしてエルサレムの最後の門を通過するか」、「アブラハムが息子のイサクを犠牲に捧げた場所へのイエスの到着」、「磔刑に処される場所を見た時のイエスの卒倒」、「《キリストの牢屋》における救い主の監禁」、「聖衣を剥奪されるイエス」、「磔刑」、「十字架設置」、「イエスの脇

腹からどのように水と血が流れたか」の13場面**を信徒の同情的な考察に委ねている。以上のように、これら2つの信心業はもはや受難全体を含むイエスの移動には及んでおらず、代名詞的な道程、すなわちイエスがピラトの館からカルヴァリオまで行った移動に限られている。以上のことから、カルヴァリオ山への救い主の道行きに対する信心はきわめて古いことも推測される。これについては後で再び取り上げることにしよう。

現存する一冊の受難に関するフランドルの手引書は、イエスの苦しみの移動に対する信心とイエスの受難の留にも関係しているように思われる。この手引書は、フランス語訳（パリ、1550年頃と1570年）ではベトレム某、通称「バルテルミー陛下」と呼ばれている人物によって、おそらく1471年から1490年までの間に編まれた、粗雑な挿図を伴った16葉の小さな仮綴じ本である⁽¹⁵⁶⁾。H. サーストン^(156a)は、この人物を、おそらくマルケ州アンコーナ県のイェージで1475年に出版された小冊子の著者であり、その中で聖地の免償を示すことを主張していたイストラのプーラの聖堂参事会員バルトロメオ何某と同定する傾向にある。しかし、我々にはこの結論は承認できず、ベトレムはフランドル人に違いないと考える。この小冊子はひじょうに普及したものであり、後で十字架の道行きについて論じる際にそれについて再び取り上げることになる。同冊子についてはフランドルの8版、すなわち1518年のアントウェルペン版（それぞれ異なる3版）、年代不詳（1525年頃）の1版、1520年のデルフ

ト版、年代不詳（1518年以降）のライデン版、1536年と1561年のアントウェルペン版と、パリで1550年頃と1570年に出版された2つのフランス語訳が知られている。ドイツ語訳は1566年頃に出版され、カルトゥジオ会士スリウスはそれをラテン語に翻訳した。1518年のフランドル版はC. J. ゴネによって再版された⁽¹⁵⁷⁾。後述することになるこの小冊子は、キリストの受難全体に振り分けられた25の留の列举と各留における黙想、並びにそこで唱えるべき祈りを含んでいるだけでなく、キリストが最後の晩餐からカルヴァリオ、もしくは埋葬まで行った多くの苦しみの移動の列举と、各場所を先行の場所から隔てている距離のオーヌ尺による記載をも含んでいる。こうした行程と黙想は一週間のすべての曜日に分配されている。各行程の到着点、すなわちキリストが立ち止まり、また信徒が立ち止まってキリストがそこで耐えた苦しみを観想し、同情し、祈る場所である留についてはもっと後で述べることにしよう。

以上のことから、救い主の移動に対する信心はフランドルでも実践されていたことが推測される。さらに、ヘント大学図書館の手稿本1734のフォリオ87裏と、ルーヴェン大学図書館の手稿本G. 218のフォリオ72中に現存しているキリストの移動を記念した2つの信心業には、その他の典型的な例が複数存在している。ヘントの手稿本には、「オリーヴ園からアンナの館までの移動」、「アンナの館からカイアフアの館までの移動」、「カイアフアの館からピラトの館までの移動」、「ピラトの館からイエスが白衣を着せられるヘロデの館までの移

動、「ヘロデの館からイエスが鞭打たれ荊の冠を載せられるピラトの館までの移動」、「ピラトの館から外に連れ出され民衆に示されるまでの移動」、「法廷に戻り紫のマントを取り去られるまでの移動」、「救い主が死刑を宣告されるリトストロートスまでの移動」、「十字架を担ぎながらのカルヴァリオまでの移動」が示されている。各行程には、キリストの苦しみが露わに描写され、また明らかに同情を惹起させたに違いないきわめて偉大なリアリズムで提示されているひとつの祈りが添えられている。この手稿本の著者である修道女は、こうした移動についての黙想を日常的な信心業とし、修道院のなかで守らなければならなかった服従の戒律によって課された日常的な移動のなかでそれを実践した。ルーヴェンの手稿本にもほぼ同じ要素が見出される⁽¹⁵⁸⁾。

ベトレムの著作に類似したものに、フランシスコ会士が編み、1521年にニュルンベルクで出版された『靈的道行き (Die geistlich Strass)』という別の本がある。この著者の目的は、信徒の崇敬に対して、苦しみの道行きの留ではなく、ある留から別の留へ進む間のキリストの苦しみに満ちた移動を提示することにある。また単にキリストが十字架を負って辿った行程だけではなく、受難全体の間、彼が完遂した行程をも提示することにある。民衆の信仰心をさらに駆り立てようとして、著者はキリストが耐えた苦しみを版画や黙想、祈りによって示している。彼は自身の目的を序文において次のように披瀝している。「民衆の間には、キリストの受難に対する大いなる愛が見出される。なかには、他者の敬神徳を

呼び覚ますために、例えば十字架や、最後の晩餐かオリーブ山を表現したモニュメントのようなものを建造することで、自らの信仰心を示す者があった。また、なかには7回の転倒や7回の流血を選ぶ者もあれば、聖母やキレネ人、ウェロニカ、その他の同種の人々との出会いといった、イエスがカルヴァリオに達するまでに生じたと推測されるすべてのエピソードを伴った十字架を担うキリストを選ぶ者もいる。いずれにせよ今日では、そうしたことはすべて、高貴な巡礼者が聖地から持ち帰った寸法に則した叙述や寸法、距離を添えてしばしば出版されている。それゆえ私は、キリストの苦しみの記憶を維持するのに、単に十字架を担っている間のキリストだけではなく、むしろ受難の最初から最後まで、すなわちベタニアから磔刑までのキリストを考察したのである。私は、同じ時間か同じ場所で生じた事柄、例えばシオン山における3つの出来事である過越祭と(弟子の)洗足、エウカリスティアの秘跡の制定をひとつに結びつけた。同様に、オリーブ園については、人里離れた所に引きこもる3人の弟子を伴ったイエスとグロッタにおける祈り、キリストの捕縛を統合し、カルヴァリオ上については、十字架が準備される場所と、十字架が用意されるまでキリストが繋がれ、その後で十字架へと導かれて聖衣を剥奪され、磔刑に処されることになるもうひとつの場所とをひとつに結び付けた。⁽¹⁵⁹⁾

移動の回数は、「イエスの聖母への暇乞い」と「最後の晩餐」、「オリーブ園」、「アンナの前」、「カイアファの前」、「ピラトの前」、「ヘロデの前」、「再びピラトのもとで

の荊冠と笞刑とエッケ・ホモ、「死刑を宣告され十字架を担うイエス」、「聖母との出会い」、「転倒と十字架を運ぶのを手伝うよう強いられるキレネ人」、「エルサレムの娘たちとの出会い」、「ウェロニカとの出会い」、「磔刑」、「十字架設置」、「十字架降下」、「埋葬」の17である。この本を著したフランシスコ会士は、やはりベトレムと同じように、各移動の終りに、たった今列挙した諸場面を表現している版画か彫刻の前で、詩篇か主の祈りを唱えよと述べているので、各行程の到着点をも考慮に入れているように思われる。彼は富者には同種の彫刻を建てるよう勧め、貧者には彫刻を十字架に替えることができるとしている。富者も貧者も自邸にこうした留を建てることのできる上、著者によれば、留と留との間の正確な距離を再現する必要はないし、記されている全歩数を歩く必要もない。なぜなら、足でするより心で巡礼する方がはるかに価値があるからである、と彼は締め括っている⁽¹⁶⁰⁾。聖地で10年過ごした小さき兄弟会士ニコラス・ヴァンケル⁽¹⁶¹⁾の著書には、同数の留が同じ順序で見出されることから、N. パウルスは、このフランシスコ会士ニコラス・ヴァンケルこそ、おそらく『靈的道行き (Die geistlich Strass)』の著者に違いないと結論づけている⁽¹⁶²⁾。

さらに、S. J. G. シェラー (1605 年没)⁽¹⁶³⁾やガイラー・フォン・カイザースベルクの著作⁽¹⁶⁴⁾、聖イグナティウスの『靈操』にも、キリストの7回の苦しみの行程の信心業が見出される。7回の移動とは、「最後の晩餐からオリーヴ園まで」、「ゲツセマネからアンナの所まで」、「アンナの所

からカイアファの所まで」、「カイアファの所からピラトの所まで」、「ピラトの所からヘロデの所まで」、「ヘロデの所から再びピラトの所まで」、「ピラトの所からカルヴァリオまで」である。また、ヨハン・マイアー・フォン・エック (1543 年没) も9回の移動について認識しており⁽¹⁶⁵⁾、17世紀にはフランシスコ会士 S. メンハルトが救い主の10回の移動を列挙して、信徒に、移動と同数の教会堂か祭壇を訪れて、各行程においてイエスが耐えた苦しみを靈的に黙想しながら、頻繁に毎日でも10回の移動を行うよう勧めている^(165a)。ほぼ同じ頃、ケルンで M. ティンプの小冊子が出版され、その中でキリストの10回の苦しみの移動に対する崇敬に際して従うべき方法が示される⁽¹⁶⁶⁾。19世紀になっても、ルクセンブルクやバイエルンには救い主の苦しみの移動に対する信心の名残りが残っており、信徒のなかには聖木曜日の夜に7つの教会堂か十字架を訪問する者がいた⁽¹⁶⁷⁾。

以上のことからわかるように、救い主の苦しみの移動に対する信心は、北方の国々にひじょうに広まっており、わけてもドイツでは、キリストの転倒に対する敬虔な信心とともに比較的近代まで存続した。上述のことから、キリストの転倒に対する信心においてと同様に、キリストの移動に対する信心にも、十字架の道行きの形式的な要素、すなわちイエスの受難や彼が行った苦しみの移動に靈的に同伴することが再び見出されるのがわかる。しかし、移動の実践と十字架の道行きのそれとの間には根本的な相違が存在している。救い主の移動に対する信心が十字架の道行きの信心を準備し

たということが認められなければならないとしても、その後人々がむしろ苦しみの行程の代名詞的存在、すなわちピラトの館からカルヴァリオまでの行程に留意したのはまったく自然なことであったため、これら2つの信心が根本的には別のものであって、同じものではありえないことを否定することはできない。

b. キリストの苦しみの留^{りゅう}に対する信心

キリストの転倒と移動に対する信心が特にドイツに広まっていた頃、ヨーロッパの他の国々、とりわけベルギーでは、救い主の受難の苦しみの留、ないしは受難の間にキリストが行った休止に対する信心が拡大していた。このように留はイエスの移動と密接に関係している。というも留は、救い主があれかこれかの道行きを行った後、おおよそ長く留まった終端、すなわち場所に当たっているからである。それゆえ、前もって我々が強調したように、実践のなかでこれら2つの信心にある種の融合と浸透があったことは驚くにあたらない。なぜならば、一方は言うまでもなく必然的に他方を前提としているからである。それゆえ、移動について主要な2つのシリーズ、すなわち受難全体に及んでいた移動と、ピラトの館からカルヴァリオまでの行程だけを含んでいた移動が確認されたように、留についても同じ2つのシリーズが識別されることになる。さらに、移動の順序と選択にきわめて大きな多様性が存在していたのと同様に、留の選択にも、また採用されている留の順序にもきわめて深遠な相違が観察される。そしてこのことは、十字架を負いな

がらキリストが辿った道だけを含む留に当てはまるのと同様、受難全体の上に振り分けられた留にも当てはまる。

しかし、キリストの受難の苦しみの留に対するこうした信心は、キリストの苦しみによって聖別された聖所の単純な模造体からは区別されなければならない。前者においては、キリストに同伴して彼が受難の間に行った多くの苦しみの移動を共にし、彼とともに多くの場所で立ち止まって彼が耐えた苦しみについて黙想、並びに観想し、また彼と合一してその苦しみに参加することが提示されている。これに対し、後者においては、エルサレムのキリストゆかりの聖所をほぼ正確に再現して、巡礼者が現実^{リアリティ}にそれらを訪問したのと同じように、それらを霊的に訪問できるようにすることが意図されている。このことから、救い主の留に対する信心、特にキリストが十字架を担って辿った行程に対する信心は、十字架の道行きの現在の信心業と密接に関係しているが、キリストゆかりの聖所の模造体に対する信心は、受難とは関係のないモニュメント群がこうした聖所の模造体に存在しているだけに、なおさら十字架の道行きとは遠くて間接的な関係しか持っていないということが導き出される。

本研究の先行する幾つかの箇所^{箇所}で、すでに15世紀より前に造られたキリストゆかりの聖所の模造体については言及したので、今度はそれ以後に出現したきわめて優れた模造体について述べる。アウグスティヌス会士でファブリアーノ出身のジョヴァンニとピエトロが、聖地から戻った後、15世紀初めにマルケ州アンコーナ県の生まれ故

郷の町ファブリアーノに建設させた、サント・セポルクロ（聖墳墓）と名付けた教会堂はその例である。彼らはそこに5つの祭壇を建設した。それらのうちのひとつでカルヴァリオ山と呼ばれた祭壇は、磔刑に処せられた救い主に捧げられ、ヨシャファトの谷と名づけられた他の祭壇は、息子と出会った際の聖母の卒倒を記念して卒倒の聖母に献じられていた。ピエタ（図3）が置かれた3番目の祭壇は、息子の亡骸を両腕に受け取った時の聖母の苦悩を記念していた。その他の祭壇は受難とは関係していない。さらに「カルヴァリオ山」の片面にはエルサレムのもと同じ大きさの墓が、そしてもう片面には聖母の墓がある⁽¹⁶⁸⁾。

我らが主の受難のゆかりの聖所の最も見事な模造体のうちのひとつであり、またキリストの受苦しみを記念して後年建てられた留に最も似ているものは、疑いなく、ドミニコ会の福者コルドバのアルヴァレスが、聖地から戻って1405年に建てた一連の小祈祷堂で、それらは彼自らがコルドバ近くの山上に建てたスカラ・コエリ修道院の周囲に見られる。アルヴァレスはこれらの祈祷堂のなかに多くの受難場面を表現させた。十字架の道行きについて研究しているいかなる歴史家もこれまでそれらの場面を周知させておらず、そこに表現されている受難のエピソードが認識されていないのは確からしいので⁽¹⁶⁹⁾、ドミニコ会士 J. B. フィエが紹介しているように、それらを列挙することは無駄ではなからう⁽¹⁷⁰⁾。フィエの著書には、「祈祷堂群のひとつにはオリーブ園で祈るイエス・キリストが見られる。他の祈祷堂にはユダヤ人による捕縛が見られ、

ユダヤ人たちの先頭にいるユダはキリストに近づいて偽りの口づけをしようとしている。3番目の祈祷堂には笞刑、4番目には荊冠、5番目には階段の最上段で手に葦をもち、愚弄目的で両肩に古びた緋色のマントをかけられたイエス・キリストと、「この人を見よ」と言いながら彼をユダヤ人に示しているピラトの場面、6番目にはカルヴァリオに運ぶ十字架を負ったイエス、7番目には十字架設置と十字架上での苦悶、最後に当たっていた8番目の祈祷堂には聖母の両膝の上に横たわるイエス・キリストが見られる」とある。フィエは、このような場所で福者アルヴァレスは「祈りと悔悛の信心業を行いながら、夜の大半を過ごした」と付記している。以上のことからわかるように、これらの祈祷堂は、同じような痛ましい受難場面を想起させるために後年建てられることになる礼拝堂群と著しく類似している。

しかし、福者アルヴァレスの祈祷堂群と後年建設されることになる祈祷堂群との間には、根本的かつ形式的な相違がある。後年建てられることになる礼拝堂群は、受難の痛ましい移動の間にイエスが行った休止を回想するために建てられ、人々はイエスの受難とその移動に霊的に従っていたが、これに対して福者アルヴァレスは、各祈祷堂に表現された救い主の苦しみを黙想しているとはいえ、キリストの苦しみの道行きには同伴しなかった。このように、アルヴァレスの祈祷堂群には十字架の道行きの形式的な要素が欠けているのである。福者アルヴァレスが提供した典型例が多くの宗教的共同体の模範となったことを考えれば、

彼が建設させた巡礼礼拝堂群が十字架の道行きの発生に影響を与えたことは認められるとしても、上述のことから、彼はいかなる点でもその創設者とはみなされえないと結論される。福者アルヴァレスがエルサレムのキリストゆかりの聖所だけを模造しようと考えていたことは、彼が丘（カルヴァリオ山）と小川（ケドロ）があった場所に上述の巡礼礼拝堂群を建設させたことが指摘されるならば、なおさら明白といえる。こうして、福者アルヴァレスが造ったキリストゆかりの聖所の模造体からは、十字架の道行きを建造しようとしたという考えは一切排除される。さらにこの時代以降、すべての国々において、救い主の受難のあれかこれかの場面、わけてもオリーブ園での苦悶やカルヴァリオ、聖墳墓の数多くの模造体や表現が目に見えるようになる⁽¹⁷¹⁾。

エルサレムのキリストゆかりの聖所の最も有名な模造体のひとつは、おそらくフランシスコ会の福者ベルナルディーノ・カイミが、聖地から戻った後、15世紀の最後の20年の間にノヴァーラ県ヴァラッロの山上に建設させたもの（図4～7）である。礼拝堂数は当初はかなり制限されており、全体的に見てキリストの受難の場面だけを含まれていたが、その数は次第に増え、救い主の生涯全体に拡大した。こうして19世紀末頃にはその数は40以上を数え、場面はアダムの墮落から聖墳墓にわたっていた⁽¹⁷²⁾。

ヴァラッロのそれらに劣らず見事なエルサレムのキリストゆかりの場所のもうひとつの模造体は、フランスのロマン＝シュール＝イゼール（ドローム県）のそれ（図8

～10）である。ロマンのカルヴァリオ山は、その創設者であるロマネ・ボファンの意図においては、元来は、エルサレムの十字架の道行きの7留による模造体（1516年）として、ロードス島やそれ自体がひとつの模造体であったフリブール（スイス）のカルヴァリオ山風に構想されたものであったが、ヴァラッロのそれと同じくらい早くから、礼拝堂（それらはエルサレムのあらゆる種類のキリストゆかりの聖所を記念していた）の数が増えた。それは主に、聖地から戻り、ロマンのカルヴァリオ山に隣接する小さな修道院に住んで、ロマンの町がエルサレムの忠実な写しであるのに驚くほど適し、また聖都のすべてのキリストゆかりの聖所を再現するのに最適であると明言した2人の小さき兄弟会士の教唆によるものであった。巡礼礼拝堂は、時代が進むにつれてますます数を増し、それらは受難の場面だけではなく、キリストの生涯、特にその復活後の場面に及んだ。その数は1556年には19を数え、1638年には37に達し、今日では40になっている⁽¹⁷³⁾。エルサレムのキリストゆかりの聖所のこうしたすべての模造体には、我々の十字架の道行きに似たものは何もないことが明らかであるとしても、いずれにせよ、そこに大筋において典型的な信心的巡礼観が見出されることは認められなければならない。

現存する史料に拠れば、キリストの受難によって聖別された場所もしくは留に対する信心には、崇敬するよう定められている痛ましい諸場面の出発地点に応じて、4つの主要なグループが識別されるように思われる。

一番長いグループ、すなわち受難に先行するイエスの聖母への暇乞いから始まり、イエスの埋葬で締め括られる信心から始めることにしよう。これら2つの場面を両端として、両場面の中に数も配置もさまざまな幾つかの留が挿入されている。十字架の道行きについて研究している歴史家は、それについては、例えば低地オーストリアのビザンベルクにおける「暇乞い」、「オリーブ山」、「裏切り」、「捕縛」、「十字架降下」、「聖墳墓」の6留の例や、グロースホイバッハ（ドイツ）近郊のエンゲルスベルクにおける「暇乞い」、「オリーブ山」、「笞刑」、「荊冠」、「十字架を運ぶイエス」、「ピエタ」の6留のそれ、バッセンハイム（ドイツ）における「暇乞い」、「オリーブ山」、「笞刑」、「荊冠」、「死刑宣告」、「十字架を運ぶイエス」、「磔刑」⁽¹⁷⁴⁾の7留のそれといった、わずかな例しか引用していない。しかし、この信心業は、先に分析した『靈的道行き (Die geistlich Strass)』(ニュルンベルク、1521年)からわかるように、かなり広まっていたに違いない。同書の中で著者は、受難全体にわたって救い主が被った苦しみによって聖別された留か、あるいはキリストゆかりの聖所への靈的訪問へと信徒を誘うことと、同時にキリストの苦みの移動へ参加する方法を信徒に教えることを意図している。このようにこの手引書では、キリストの移動に対する信心と留に対する信心は互いに浸透し合っている。

このグループと並んで、信徒が崇敬し訪問したもうひとつの別の留のシリーズの存在に気付く。それは、痛ましい受難に遭う前の晩に、イエスと弟子たちが行った最後

の晩餐から始まっている。その例である1509年にコペンハーゲンで刊行された28葉のデンマーク語の小冊子、『*Haer begynnes the faeruthen staeder sam wor herre tolde syn pyne paa***』は、キリストの苦しみに靈的に合一し、その苦しみの道行きを彼に同伴しながら、以下の15留を毎日心を込めて訪問するよう勧めている。15留とは、「弟子の洗足とエウカリスティアの秘跡の制定を伴った最後の晩餐」、「オリーブ園」、「イエスがユダに裏切られてユダヤ人に捕えられた後、町に連行されて侮辱され罵られ、あらゆる種類の虐待を受けた所」、「平手打ちと偽りの告発を伴ったアンナの家」、「尋問と死刑宣告、甚だ卑しむべき冷やかしを伴ったカイアファの家」、「イエスが被った虐待を伴ったピラトの館」、「キリストが白い衣服を着せられたヘロデの館」、「嘲笑の場所」、「荊冠の場所」、「十字架を担いで行った移動、聖母やエルサレムの娘たち、キレネのシモンとイエスとの出会いと十字架の下での転倒」、「救い主が多くの虐待を被ったカルヴァリオ山」、「磔刑の準備の間に石塊上に投ぜられたキリスト」、「聖衣を剥奪され十字架上に投ぜられたイエスと磔刑」、「十字架降下」、「埋葬」である。この小冊子にはスウェーデン語版も存在している⁽¹⁷⁵⁾。

苦しみの留を最後の晩餐から埋葬までのキリストの受難全体の上に分配するこうした方法は、低地地方でも知られた。それは、すでに引用したベトレム氏の小冊子、『これは我らが主の受難についての敬虔な黙想である (Dit is een devoet meditatie op die passie ons heren)』から推論される。著者は

同書において冒頭から、同書が、挿絵や、キリストが我々のために耐えたこうした場所を互いに隔てている（エルサレムで注意深く測定された）距離の表示、各留に適した祈り、また、イエスの受難に霊的に同伴し救い主が耐えた苦しみを同情と悔悟の心で黙想するという条件で各留において得られる免償の表示を伴った、我々が主の受難についての黙想集であることを明記している。黙想は一週間のすべての曜日に割り振られている。著者は、月曜日には、最後の晩餐から主の祈りと天使祝詞がそこで唱えられるオリーブ園まで（3,500 オーナ**）、次いでイエスが使徒たちを置き去った場所からペテロとヨハネ、ヤコブを置き去った場所まで（34 オーナ）、そこから御苦禱の洞窟まで（12 オーナ）、次いでユダの裏切りの場所まで（34 オーナ）を黙想するよう提案している。火曜日には、アンナ（1,500 オーナ）、カイアファ（89 オーナ）、ピラト（500 オーナ）、ヘロデ（82 オーナ）のもとへ導かれる。水曜日には、ピラトの所に戻って（500 オーナ）、死刑の判決が宣告された法廷の場に赴き、次いでイエスが十字架を担わされた場所、さらにイエスが十字架に押し潰された聖なる階段上の場所（15 オーナ）へ向かう。木曜日には、転倒の場所からエッケ・ホモのアーチまで（23 オーナ）、そこから息子と出会ったときに聖母が卒倒した場所まで（100 オーナ）、さらにそこからキレネのシモンとの出会いの場所まで（72 オーナ）、続いてウェロニカの家まで（82 オーナ）、そして最後にイエスが再びうつ伏せに倒れた法廷の門（300 オーナ）までの道行きが黙想

される。金曜日は、法廷の門から頂上に着いた後で倒れたカルヴァリオ山までイエスが行った道行き（231 オーナ）の黙想、同様に聖衣を剥奪されて磔刑に処せられたイエスについての黙想に捧げられ、次いで聖母と聖ヨハネが十字架の下にいた場所まで（15 オーナ）向かう。土曜日には、十字架から母の両腕に託された場所まで（38 オーナ）向かい、続いて墓まで（54 オーナ）イエスの跡を辿る。日曜日には、昇天の場所まで向かい、次いで聖霊降臨の場所、そして最後にナザレの家へと進む。いずれにしても、十字架を担ってピラトの所からカルヴァリオへ赴いた時にキリストが辿った行程に沿って見出される留群についてだけ、適用された祈りが見出されることは言及されるべきである。

ベトレムは、キリストの受難によって聖別されたその他の聖所の訪問よりも、いわゆる十字架の道行きの留の霊的な訪問に重きを置き、後者について長々と述べている。他方で彼は、ピラトの館からカルヴァリオまでの道行きのなかで救い主の考えに合一し、この骨の折れる道行きを彼と共にして、彼が耐えた耐え難いすべての苦しみに霊的に参加すべきであることを際立たせている。それゆえベトレムは、先に挙げたデンマーク語の小冊子の著者とまったく同様に、2つの十字架の道行き、すなわち受難のすべての場所を含む長い道行きと、現在の十字架の道行きと一致するそれより短い道行きとを区別していることになる。実際、デンマーク人の著者の著作には、我々の十字架の道行きの留と一致する多くの留、すなわち「聖母やエルサレムの娘たち」、「キレネ

のシモンとイエスとの出会い」、「イエスの転倒」、「聖衣を剥奪されるイエス」、「磔刑」、「十字架降下」、「埋葬」が見出される。また、ベトレムの著作に見られる短い十字架の道行きの留と、我々の十字架の道行きの留との類似はさらに著しい。というのも、そのフランドルの小冊子には、「エルサレムの娘たちとの出会い」を除いて、我々の十字架の道行きと同じ留が同じように見出され、しかも何より重要なことに、それらが「ピラトによるイエスの死刑宣告」、「十字架を担うイエス」、「最初の転倒」、「聖母との出会いと2回目の転倒」、「キレネのシモンに助けられるイエス」、「イエスの聖顔を拭うウェロニカ」、「別の転倒（ベトレムの著書では3回目の転倒）」、「カルヴァリオの頂きでの4回目の転倒」、「聖衣を剥奪されるイエス」、「磔刑」、「十字架上のイエス」、「十字架降下」、「埋葬」という同じ順序で見出されるからである。おそらく1471年から1491年までの間に編まれたとすでに指摘したように、この小冊子がかなり古いものであることを考慮するならば、十字架の道行きの歴史にとっての同冊子の重要性が再認識される。十字架の道行きの歴史において、当時崇敬されていた留と現在の我々の十字架の道行きを構成している留との間に、このように大きな類似性が見られるのは実際初めてのことである。従って、我々の十字架の道行きの起源と構成の上にベトレムが及ぼした影響は明らかであり、後代の著述家はいずれも14留の指定をベトレムに依拠しているのである。

最後の晩餐に始まり聖墳墓で終わる長い十字架の道行きは、17世紀後半から18世

紀前半までの間に、S. J. P. アドリアン・パルヴィリエ（パリ、1630年）の小冊子、『我らが主イエス・キリストの受難の維持に使用されるエルサレムの留（*Les Stations de Jérusalem pour servir d'entretien sur la passion de N. S. J. C.*）』のおかげで、尋常ならざる人気を博したように思われる。著者によって十字架の道行きの作り方が書中で教示されているこの小冊子は、後述することになるアドリコミウスの著作をおそらく例外として、同種のいかなる書物によっても凌駕されないほどの並外れた人気を博した。実際、この本については少なくとも53のフランス語版が存在しており、ドイツ語や英語、ブルターニュ語、スペイン語、オランダ語、ポーランド語にも翻訳された⁽¹⁷⁶⁾。P. H. サーストン⁽¹⁷⁷⁾は、同書のブルターニュ語版を4版同定し、「P. A. パルヴィリエの方法についての英語訳は、他の何らかの十字架の道行きの作り方が知られるよりも前に版が重ねられたように思われる」と述べている。この小冊子が享受した大変な人気は、パスカヤアドリコミウスに帰される14留の十字架の道行きの作り方が普く広がっていたわけではなく、その伝播に際しては、ドイツ（7回の転倒）やフランス、イギリス（P. A. パルヴィリエの方法）で採用されたその他の人気のある方法が障害となって、大きな困難にさえ遭遇したことを証している。P. A. パルヴィリエの十字架の道行きは、「最後の晩餐」、「御苦禱の洞窟」、「イエスが逮捕された場所、すなわちオリーブ園の門」、「イエスがユダヤ人たちにその中へと投げ落とされたケドロンの急流」、「アンナの家」、「カイア

ファの家」、「ヘロデの館」、「笞刑の場所」、「荊冠の場所」、「エッケ・ホモのアーチ」、「聖母が十字架を担っていた息子と出会い卒倒した場所」、「我らの主が十字架の下に倒れ、キレネのシモンに助けられた十字路」、「エルサレムの婦人たちがイエスに涙した場所」、「イエスの顔を拭ったウェロニカの家」、「イエスが自身の死刑宣告文が述べられるのを聞いた法廷の門」、「2人の泥棒の間でイエスが十字架に上げられたカルヴァリオ」、「聖墳墓」、「イエスがそこから昇天したオリーブ山」、の18留を数える。

この十字架の道行きの作り方について、著者は、都市では列挙された留の場所として教会堂や祭壇、もしくは聖画像を選ぶことができるが、田舎では十字架か同じ教会堂のさまざまな部分を選ぶことができると明言している。修道院や私邸には小礼拝堂を建て、それらの中には受難の各場面を表現した聖画像を設置できる。P. A. パルヴィリエがさまざまな留の場面を表現している版画や彫刻を備えた十字架の道行きの建立に触れていないのと同じように、K. A. クネラー⁽¹⁷⁸⁾はそれについて、当時は十字架の道行きはフランスではまだ珍しかったに違いないと締め括っている。

キリストの受苦によって聖別され、先行の2つのシリーズよりもさらに普及したと思われる別の苦しみの留のグループは、留がオリーブ園から始まり、カルヴァリオ山、すなわち聖墳墓で終わるものである。それはまた、歴史の中で我々が会う、民衆によって崇敬された最古の留のシリーズのひとつでもある。ここでも、先行のいわゆる十字架の道行きにおいてと同様に、留の数

と順序にはこれ以上はない多様さが確認される。この留のシリーズはチロル地方でかなり人気があったように思われ、すでに1482年に、同地方のヴィンシュガウに、「オリーブ園」、「イエスの逮捕」、「ピラトの前のキリスト」、「笞刑」、「荊冠」、「十字架を運ぶイエス」、「磔刑」の7留のシリーズが見出される。オリーブ園から始まる彫刻で飾られた15留のシリーズは、シュヴァーツとゼーフェルト（チロル地方）で1515年に崇敬されたらしい⁽¹⁷⁹⁾。16世紀初めには、シュヴァーツの小さき兄弟会士の修道院に、「オリーブ園」、「ユダの口づけ」、「ピラトの前のイエス」、「嘲弄され虐待されるイエス」、「笞刑」、「荊冠」、「エッケ・ホモ」、「十字架を運ぶイエス」、「キリストの転倒」、「聖衣を剥奪されるイエス」、「磔刑」、「ピエタ」、「埋葬」からなる、彫刻による13留のシリーズが存在していた。

オリーブ園から始まる留のシリーズは、特に17世紀に、主としてベルギーのフランス語圏とフランス北部で大流行した。このシリーズは、これらの地域ではもっぱら「オリーブ園」、「アンナの家」、「カイアファの家」、「ピラトの館」、「ヘロデの館」、「再びピラトの館」、「カルヴァリオ山」の7留で構成されていた。この種の十字架の道行きは福音書に密接に関係し、聖典に語られていないものは一切含んでいないため、その他の多くの十字架の道行きに対して優位を占めている。当時流布し始めていた14留の十字架の道行きの代わりに、この十字架の道行きを導入しようとした人々がいたことは、おそらくその理由をここに求めなければならない。そうした人々のうち

の一人であるベルギーの Ph. アノテル（1637 年没）は、たった今列挙した 7 留に従う受難の黙想を提案し、この黙想を霊的な 3 つの道行きに関係づけている。彼は、一週間の各曜日に 7 留のうちのひとつの留についての黙想を当て、また、一週間全体に 3 つの霊的道行き、すなわち煉獄的道行き、啓発的道行き、合一的道行きのうちのひとつについての黙想を割り当てている⁽¹⁸⁰⁾。フランス人の J. クラッセ（1692 年没）も 7 留シリーズについて記しているが、それは先行の 7 留シリーズとは異なり、「オリーヴ園」、「アンナとカイアファのもとのイエスの嘲弄」、「ヘロデのもとのキリスト」、「ピラトの館での笞刑」、「荊冠」、「磔刑」、「死」からなっている⁽¹⁸¹⁾。

この 7 留シリーズを広めるのに最も貢献したのは、おそらくオランダ人のイエズス会士シャルル・ムサール（1653 年没）である。彼は留に対する信心を初めてウィーンに導入した人物と考えられ、同信心はウィーンからオーストリアやハンガリー、ドイツに流布した。ムサールは、同信心の手引書である自身の『カルヴァリオ巡礼（*Peregrinus Calvariae*）』⁽¹⁸²⁾の中で、受難を、キリストが立ち止まって特別な苦しみに耐えた 7 つの動作か 7 つの留、ないしは 7 つの主要な場所に分けている。Ph. アノテルが挙げたものと同じであるそれら 7 つの留に対する黙想は、一週間の 7 つの曜日に割り振られている。ムサールは補遺の中で、私邸や、教会堂か礼拝堂の中に、あるいは小道や公道に沿って、彫刻か聖画像を添えてこうした 7 つの留を建て、それをキリストと一体となって彼の苦しみに同情しながら

ら訪問することを勧めている。こうした留は大成功をおさめ、それらのうち最初のシリーズがウィーン近郊のヘルナルスに 1639 年に建設され、続いてその他の町、例えばリンツ（1658 年）やハンガリーのノイザールなどに広がった。信徒の礼拝用として礼拝堂内に掲げるためにこうした留の聖画像を依頼したのは、例えばヴェスプレームの司教ジョルジュⅢジャクスイト（1638-1642 年）のような司教たちであった⁽¹⁸³⁾。

すでに 17 世紀初めには、受難の 7 つの留の黙想と訪問は、リエージュのサン・セプルクル聖堂女子教会参事会員らのもので、日常的な信心業として実践されている。彼女らの『会憲細則（*Constitutions*）』（リエージュ（?）、1631 年）中には、「全員一緒に行列によってか、自身のために各々で、毎日受難の留（の黙想と訪問）がひとつ行われんことを…（括弧は訳者による）」と規定されている。これらの留は Ph. アノテルや Ch. ムサールの留とは若干異なり、「オリーヴ園（月曜日）」、「アンナとカイアファの家（火曜日）」、「ピラトの館（水曜日）」、「ヘロデの館（木曜日）」、「カルヴァリオ山（金曜日）」、「聖墳墓（土曜日）」、「復活（日曜日）」を含んでいた。さらにこれらの『会憲細則』は、当該曜日の各留において、留ごとに異なる幾つかの短い祈りを唱え、最後に腕を組んで愛か同情の動作を心の中で行うよう命じていた。その上これらの留は、回廊や共同寝室、あるいは建物の幾つかの別の場所に別々に表現されていなければならなかった。この種の十字架の道行きは、同会の修道院が急速に増加

するにつれて、ベルギー（とりわけフランス語圏）やフランス、ドイツに広まった⁽¹⁸⁴⁾。

受難の7つの留に対する信心は、イエズス会士アウグスト・ファン・テイリンゲン（1665年没）の証言からわかるように、ベルギーのフランドル地方でも知られていた。彼は信徒たちに⁽¹⁸⁵⁾、自分たちの部屋か家のそれぞれ異なる場所に、キリストがそれらの地点においてより多く苦しみに耐えた7つの留の聖画像を掛けるよう勧めている⁽¹⁸⁶⁾。この7留のシリーズはバイエルンでも崇敬された⁽¹⁸⁷⁾。また、ルクセンブルク大公国やヨハネスベルクでも、「オリーブ園」、「死刑宣告」、「十字架を担うイエス」、「磔刑」、「死」、「ピエタ」、「聖墳墓」の7留に出会う。同様にジーベンボルンとグライッシュとの間にも、「オリーブ園」、「ユダの裏切り」、「答刑」、「荊冠」、「ウェロニカとの出会い」、「死」、「十字架降下」の7留が見出される。1620年にカプチン会士によってアーロン（ベルギー）に建設された7留のシリーズは、1681年に取り壊された後、1735年に「オリーブ園」、「イエスの逮捕」、「カイアファの家」、「答刑」、「荊冠」、「十字架を運ぶイエス」、「磔刑」、「十字架降下」、「埋葬」の9留によって再建された。オリーブ園から始まる最も長い留のシリーズは、フランスの、特にルルド近郊のベタラムとパリ近郊のヴァレリアン山上に17世紀初めに建設された。それら最長のシリーズには、「キリストの苦悶」、「ユダの裏切り」、「アンナの前のキリスト」、「答刑」、「荊冠」、「死刑宣告」、「十字架を運ぶイエス」、「磔刑」、「死」、

「十字架降下」、「埋葬」、「復活」⁽¹⁸⁸⁾が含まれていた。

受難の留の多くのシリーズについて論じたので、今度は十字架の道行きの現在の留、すなわち十字架を担いでキリストが辿ったピラトの館とカルヴァリオ山との間の道に沿って配され、崇敬されている留のシリーズに対して及ぼした間接的、直接的な影響ゆえに、そうしたシリーズの中でも最も興味深く重要なシリーズについて語ることにしよう。実際、信徒たちが、キリストの多くの苦しみの休止に対する信心や受難の間に彼がそこで特殊な苦しみに耐えた特別な留に対する信心において、代名詞的存在である苦しみの道行き、すなわち救い主がピラトの館からカルヴァリオまで成し遂げた道行きや、この苦しみに満ちた道行きのうちの残りの留においてよりもいっそう大きくて強烈な苦しみにそこで出会うことになった幾つかの留について、立ち止まって黙想や崇敬を行ったのは至極当然なことである。こうして、すでに15世紀後半には、キリストが重い十字架を引きずりながら辿った苦しみの道行きという民衆的崇敬が目に見えるようになる。

この信心の最初期の形態は、キリストと緊密に合一し、その苦しみに同情しながら、彼がピラトの館からカルヴァリオまで辿った、両端の2つの場所だけが示されていた道の上を、彼に従って霊的に辿ることから成っていた。人々は、ピラトの館に当たっていた市門や教会堂、市庁舎から出発し、カルヴァリオ山とみなされた別の教会堂や礼拝堂、もしくは十字架に到着していた。この行程の起点と終点とは、エルサレムの

ピラトの館からカルヴァリオまでの距離と同じ距離だけ隔たっていた。K. A. クネラーが行った列挙⁽¹⁸⁹⁾によれば、この最初期の十字架の道行きの形態に対する信心は、ヨーロッパ、わけでも北ヨーロッパにひじょうに流布し、きわめて多くの地域で実践された。

しかし人々は、転倒にしろ移動にしろ、この苦しみの道行きの両端に当たるピラトの館とカルヴァリオ山との間に、すでに見たように、イエスが十字架を運んでいた間にその道の上で展開された歴史のもしくは伝説的な苦しみの場面を偲ばせ、また特に、カルヴァリオ山への行程の残りの留においてよりも酷い虐待や耐え難い苦しみをその間に受けたり耐えたりした幾つかの留を挿入することを躊躇わなかった。もっとも、こうした十字架の道行きの大部分においては、終点はカルヴァリオではなく聖墳墓であった。先行のシリーズにおけると同様、このシリーズにおいても、留の数や順序、また可能な限り正確に示そうとしているある留から別の留までの距離の長さはきわめて多様であった。

こうした十字架の道行きの中で最古のものは、聖ヨハネ騎士団員がロードス島に建てたものであるように思われる。その十字架の道行きの留は、7本の柱で表現されており、留と留との間の距離はエルサレムにおけるそれと同じであった。このロードス島の十字架の道行きは、スイスのフリブールでまさに16世紀初めにペーター・フォン・エングリスベルクによって模造され、1515年頃にはロマン＝シュール＝イゼール（ドローム県）で、ロマネ・ボファンに

よっても模造された。後者のボファンは、1515年に行ったフリブール旅行中に、同市に建てられた留を見て強い印象を受け、入念に距離を測定した後、自身の生まれた町に類似した留のシリーズを建設させたのである。しかしこのシリーズは、すでに前もって述べたように、時代が進むにつれて増大して34留に達し、救い主がピラトの館からカルヴァリオまで辿った行程を回想するという当初の計画は完全に修正された。そして最終的にロマンでは、すべてのキリストゆかりの聖所を具備したエルサレムの都の再現が追究されることになった⁽¹⁹⁰⁾。さらにK. A. クネラー⁽¹⁹¹⁾は、南フランスのヴァレンシアにある類似の十字架の道行き（1517年）にも触れている。ピラトの館とカルヴァリオとの間に留をもち、十字架を負って救い主が辿った行程を再現しているこの種の十字架の道行きは、チロル地方にかなり流布したと思われる。同じクネラー⁽¹⁹²⁾は、十字架の道行きの同じような苦しみの場面を彫刻で表現していたシュヴァーツとゼーフェルト（1515年）の15留の十字架の道行きを挙げ、さらにトブラッハの6留の道行き（図11、12）にも触れている⁽¹⁹³⁾。

留によるこうした最古の十字架の道行きのなかで最も有名なものは、司祭のペーター・ステルクス・（ペトルス・ポテンズ）が聖地から戻って1505年頃に、エルサレムで自ら測った寸法に従ってルーヴェンに建設させたものであるように思われる。P. カランティンの著作である『カルヴァリオ山までの十字架の道行き（*Den Cruysganck tot den Berch Calvarien*）』⁽¹⁹⁴⁾には、

この十字架の道行きについてのさらに豊富な情報が盛り込まれている。信徒たちに十字架の道行きの信心業のなかで辿るべき方法を教えることを目的としているこの小冊子によれば、その留群は群像彫刻で表現されており、「ピラトによる死刑宣告（聖ヤコブ教会堂の墓地の角にある礼拝堂）」、「最初の転倒」、「キレネのシモンに助けられるイエス」、「イエスの顔を拭うウェロニカ」、「2回目の転倒（都の門にて）」、「エルサレムの娘たちに語りかけるイエス」、「3回目の転倒」、「聖衣を剥奪されるイエス」、そして最後に「カルヴァリオの礼拝堂」であった。従って、この最後の礼拝堂を入れて9留であった。留と留との間の距離は歩幅で示されており、その歩幅はP. カランティンの記載によれば、2ピエデ半(**)の長さであった⁽¹⁹⁵⁾。これらの留は、長い間信徒にとって特別な信心対象であった。ある著述家は1666年にそれについて記し、「人々は特に聖週間に殊の外敬虔にそこに巡礼する」と述べている⁽¹⁹⁶⁾。さらにその同じ著者によれば、ルーヴェンのこの留のシリーズは、現在採用されている14の留の選択と配置に対して決定的な影響を及ぼした。似たような十字架の道行きは、メッヘレンやフィルフォルデ、その他のブラバント州の諸地域に、わけてもロンデルゼール（ベルギー）の教区司祭であったマチュー・ステーンベルクを通して建設された。礼拝堂か十字架として示された7留の十字架の道行きは、ナイメーヘン（オランダ）にもすでに1580年より前に存在していた⁽¹⁹⁷⁾。いずれにせよ留の数が一様ではないこの種の十字架の道行きは、ドイツの

リューベック（1468年から）やコブレンツ（1495年）、マインツ、タン（フランス）などでも16世紀⁽¹⁹⁸⁾に見られ、オーストリアやチロル、バイエルンでは17世紀中に見出される⁽¹⁹⁹⁾。

（次号に続く）

[凡 例]（6号より再録）

1. 人名やキリスト教の専門用語等の訳語や表記については、それらの多くを、新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典 総索引』研究社2009年に拠って統一した。
2. *と (N. d. T.) : イタリア語訳者 P. ペッリッツァーリが原註に付加した註
3. *と (M. P.) : ミケーレ・ピッチリッロ神父の勧めにより、イタリア語訳者 P. ペッリッツァーリが原註に付加した註
4. **と (N. d. S.) : 邦訳者関根が原註に付加した註
5. 図版は、原文やイタリア語訳には存在せず、邦訳者関根が付したものである。

[註]（番号は前号からの通し番号）

- (91) M. Meertens, *op.cit.*, t. II, Bruxelles 1931, pp. 1-26 参照。
- (92) *Op.cit.*
- (93) *Dévotions et pratiques ascétiques du moyen âge*, Paris 1925.
- (94) *PG* 114, coll. 209-218.
- (95) *PG* 38, coll. 133-138.
- (96) *PL* 159, coll. 286-287.
- (97) *PL* 182, coll. 1138-1139.

- (98) *Büchlein der ewigen Weisheit*, cap. 17.
- (99) *Revelationes*, I.VII, cap. 15, Köln 1628; I.IV, cap. 70.
- (100) “Orationes et meditationes de vita Christi”, in *Opera omnia*, a cura di M. J. Pohl, t.V, Freiburg im Br. 1913, pp. 204-208.
- (101) E. von Dobschuetz, *Christusbilder*, Leipzig 1899, pp. 209 ss., 220-226, 251-255; M. Meertens, *op.cit.*, t.II, pp. 70-80. ここにはウエロニカの聖顔布に敬意を表した幾つかの祈りも見出される。
- * マンディリオン (*mandilion*) については、6世紀の不詳のピアチェンツァ人が、ヨルダン川東岸のひとつの隠棲修道院を挙げて、「同地にイエスの頭上に置かれた聖顔布があると言われている」と記している (C. Milani, *Itinerarium Antonini Placentini. Un viaggio in Terra Santa del 560-570 d.C.*, Milano 1977, cap.XII, 3 所載)。トープシュツによる言及は … pp. 143-145 (M. P.)。
- (102) H. Thurston, *op.cit.*, p. 217, nota 2 参照。
- (103) *Ibid.*, p. 217.
- (104) “Quarterly Statement”, London 1896, p. 215 参照。
- (105) “Zeitschrift d. Deutschen Palästina-Vereins”, Leipzig 1894, p. 167; B. Meistermann, *op.cit.*, pp. 162-163 参照。
- * 柱頭(ミナレット)に用いられた3本のうち1本はアクサーのイスラム博物館に収蔵されている)には《イエスの休息》が表現されているのであり、《ウエロニカとの出会い》ではない (H. Vincent, *Jerusalem Nouvelle*, II, pp. 590 ss.; M. Piccirillo, “Capitelli cristiani su un minareto”, in *La Terra Santa*, 44, 1968, pp. 388-392 参照) (M. P.)。
- (106) Éd. par A. Th. Graesse, Breslav 1890, pp. 231-232.
- * この著作は最近イタリア語でも再版された。*Lergenda aurea*, a cura di Alessandro e Lucetta Vitale Brovarone, Torino 1995 がそれであり、ウエロニカに關係する部分は pp. 290-292 に見出される (N. d. T.)。
- (107) *PL* 159, col. 282.
- (108) Köln 1857.
- (109) *Christus patiens*, in *PG* 38, coll. 189-190; Jean de Fécamp, *Oratio: Invoco te, Deus meus, invoco te*, in *PL* 158, col. 860; *Meditationes vitae Christi* dello Pseudo-Bonaventura, in *Opera omnia* di san Bonaventura, a cura di Peltier, t.XII, p. 606; *De meditatione passionis Christi per septem diei horas* dello Pseudo-Beda, in *PL* 94, coll. 561-567; s. Brigida, *Revelationes*, I.VII, cap. 15, Köln 1628, p. 455, ecc を参照。
- (110) *Dialogus de passione* dello Pseudo-Anselmo, cap. 10, in *PL* 159, coll. 282-283; Ludolfo di Sassonia, *Vita Jesu Christi*, a cura di Rigollet, 2^a parte, cap. 63, p. 96; Angela da Foligno, *Vita*, cap.16, in *Acta Sanctorum*, gennaio, t.I, p. 219; Gerson, *Expositio in passionem Christi*, in *Opera omnia*, a cura di L. Ellies-Dupin, t.III, p. 1190, Antwerpen 1706. また15世紀の受難書にはすべて、磔刑に処せられたキリストをたたえる祈りも見出される。
- (111) Ed. Citata, p. 219.
- (112) L.I, cap. 10, ed. Cit., p. 14.
- (113) *Op.cit.*, cap. 34.
- (114) M. Meertens, *op.cit.*, t.I, p. 137-145 参照。
- (115) *Speculum Passionis D. N. J. C.*, 2^a parte, art. 44, f.1, Nürnberg 1507.
- (116) *Creutzgang Christi*, Konstanz 1628, p. 5 参照。

- (117) *Op.cit.*, p. 96.
- (118) *Ibid.*, p. 97.
- (119) *Ibid.*, pp. 95, 76, 83, 102 参照。
- (120) *Op.cit.*, p. 105.
- (121) W. L. Schreiber, *Manuel de l'amateur de la gravure sur bois*, t.I, Berlin 1891, nn. 642-685; H. Thurston - A. Boudinhon, *op.cit.*, pp. 102-103.
- (121a) その小冊子は、1520 年頃オランダのレイデンで以下のタイトルで印刷された。
Dit is den berch van Calvarien. Een devoet hantboecxken voor een jegelic kersten mensce hoe men den berch van Calvarien opclimmen sal, ende helpen onsen Heere zijn swaer cruyce draegen.
- (122) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 152-153.
- (123) *Op.cit.*, t.II, pp. 101-103.
- (124) *Op.cit.*, pp. 96-97.
- (125) *Op.cit.*, p. 106.
- (126) *Een devote maniere om gheestelyck pelgrimage te trekken tot den heyligen lande*, Leuven 1568, pp. 17-19 を参照。
- (127) ヤン・パスカの『靈的巡礼 (*Ghestelyck Pelgrimage*)』の概説書である、17 世紀初めに印刷された『靈的エルサレム巡礼 (*The spiritual Pilgrimage of Hierusalem*)』を参照。また、H. Thurston - A. Boudinhon, *op.cit.*, pp. 107-108 参照。
- (128) *Op.cit.*, pp. 84, 86, 91, ecc.
- (129) *Ibid.*, pp. 65-67.
- (130) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 61-64 参照。
- (131) *Ibid.*, p. 63 参照。
- * * 原文では「… le inscriptions gavées sur chaque sculpture」とされているが、実際には浮彫上ではなく浮彫下の銘板に刻まれているため、訳者の判断で言葉を補った (N. d. S.)。
- (132) *Ibid.*, pp. 74-79, 85-94.
- (133) *Ibid.*, pp. 83-85.
- (134) *Ibid.*, pp. 66-67.
- (135) *Ibid.*, p. 78 e p. 95.
- (136) “Eenige geschiedkundige aantekeningen over den Kruisweg”, in *Franc. Leven*, t.XVIII, 1935, pp. 378-379.
- (137) St. Schoutens, O.F.M., *Geschiedenis van het voormalig minderbroedersklooster van Antwerpen*, Antwerpen 1894, pp. 261-268 参照。
- (138) *Op.cit.*, pp. 89-90.
- (139) *Ibid.*, pp.183-184 参照。
- (140) H. Madlener によって再版 (Saarlouis, 1907) された。
- (141) Augsburg 1764^r, p. 485.
- (142) *Op.cit.*, p. 107.
- (143) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 107-109 参照。当該箇所には、バンベルクの司教 J. フォイヒトの説教 (*Postillae Feuchtianae maioris de Sanctis tertia pars*, Ingolstadt 1589) や、イエズス会士 G. シェラーの説教 (*Postill Festtage*, München 1607)、また、フランシスコ会士 S. メンハルトの説教 (*Passiologie*, München 1674) が引用されている。
- (144) K. A. Kneller, *op.cit.*, p. 109 参照。
- (145) *Vita Jesu Christi*, 2^a parte, Venezia 1568, cap. 66, p. 491.
- (146) *Passionis dominicae sermo historialis*, Hagenau 1515, 4^a parte, art. 1.
- (147) *De passione Christi*, Basel s.d.
- (148) *Speculum passionis D.N.J.C.*, 2^a parte, Nürnberg 1507, art. 8, f.28.
- (149) *Christliche Walfart der neun fürungen oder Gäng unsers Herrn Jesu Christi im heiligen Passion*, Köln 1574.
- (150) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 110-111 参照。

- (151) *Ibid.*, pp. 111 e 154.
- (152) G. Moroni, *Dizionario di erudizione storico-ecclesiastica*, t.64, Venezia 1853, p. 292; R. Bona, *Le quattro, sette e nove chiese di Roma*, Venezia 1510; P. Martire Fellini, *Le nove ecclesie privilegiate e principali della città di Roma*, Roma 1610; E. Hurter, *Ferdinand II*, t.III, Schaffhausen 1851, p. 439 参照。
- (153) *Expositio evangeliorum quadragesimalium*, Paris 1523, f. 267.
- (154) *Op.cit.*, pp. 117-118.
- (155) *Katholik*, t.I, 1895, pp. 326-335 参照。
- ** 13 場面とされているが、原文にもイタリア語訳にも 12 場面しか列挙されていない (N. d. S.)。
- (156) *Dit is een devoet meditatie op die passie ons liefs heren ende van plaetse tot plaetsen die mate geset daer onse lieve here voer ons gheleden heeft, met figuren ende survelike oracien daer op dyenende*, Antwerpen 1518.
- (156 a) *Op.cit.*, pp. 269-270.
- (157) In “Bijdragen voor de Geschiedenis von het bisdom Haarlem”, t. XI, 1884, pp. 324-343.
- (158) M. Meertens, *op.cit.*, t.II, pp. 98-100 参照。
- (159) H. Thurston - A. Boudinhon, *op.cit.*, pp. 118-119 参照。
- (160) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 68-70; H. Thurston, *op.cit.*, pp. 114-120.
- (161) *Einkurtze Vermerckung der heyligen Stat des heyligen Landts in und umb Jerusalem, mit Verzeychnung der mercklichsten Dingen in denselbigen geschehen, auch wie nahenmt und verrn ein Stat von der andernse*, Nürnberg 1517, cap. IX 参照。
- (162) “Zur Geschichte des Kreuzwegs”, in *Zeitschrift f. Kath. Theologie*, t.XXXXIII, 1909, p. 145.
- (163) *Postill oder Auslegung der Fest und Feiertäglichen Evangelien durch das gantze Jahr*, München 1607, p. 276.
- (164) *Der Passion oder das lyden Jesu Christi unsers herrn, nach dem text der fyer Evangelisten*, Strassburg 1522.
- (165) *Homiliae de tempore ab Adventu usque ad Pascha*, t.I, Paris 1549, f. 240v.
- (165 a) *Passiologie*, München 1674, p. 553. 同頁の導入部では、10回の移動が紹介されている。
- (166) *Christliche Char-Wochen-Speiss, oder zehen elende Gänge Christi und XX hertzliche Schmerzen Mariä, in den Betgängen und andächtigen Besuchungen der Kirchen... zu gebrauchen*, Köln 1613.
- (167) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 113-114 参照。
- (168) H. Thurston - A. Boudinhon, *op.cit.*, pp. 15-17; K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 20-21.
- (169) “Stimmen aus Maria-Laach”, t.LIII, 1897, Heft 8, p. 336.
- (170) “Vie du B. P. Alvarez de Cordoue”, in *Année Dominicaine*, 1619, febbraio, pp. 647-648.
- (171) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 38-41.
- (172) *Guida illustrata della città e Sacro Monte di Varallo*, Varallo 1895; L. Wadding, “Annales Minorum”, t.XV, anno 1493, Quaracchi 1933, pp. 56-58, nn. 42-46; A. Teetaert, O.F.M. Cap., *Barthélemy de Chaimis*, in *Dict. Droit Canonique*, t.II, Paris 1935, col. 208; K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 22-24 参照。
- (173) U. Chevalier, *Notice historique sur le mont Calvaire de Romans*, in “Bulletin d’hist. ecclés. et d’archéol. relig. des diocèses de Valence, Digne,

- Gap, Grenoble et Viviers”, t.III, 1883, pp. 173-187, 221-223; t.IV, 1883, pp. 68-70; H. Thurston - A. Boudinhon, *op.cit.*, pp. 95-100; K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 24-26 は、アルザスのドゥーゼンバッハ (pp. 27-28) やドイツのゲルリッツ (pp. 28-33)、30 の礼拝堂があったポーランドのゼブジドフ (p. 33)、33 の巡礼礼拝堂を有していたシュレジエンのアンナベルク (p. 33)、その他の幾つかの地域 (pp. 33-35) を挙げている。
- (174) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 84, 86 e 91-92.
- ** 16世紀初頭に出版されたこの古いデンマーク語の書名は文章として成立しておらず、イタリア語訳においても原文のまま注記なしに記載されているので、ここでも原文のまま記載した (N. d. S.)。
- (175) *Ibid.*, pp. 114-116 参照。著者は、そこに多くのドイツ人氣質が看取されることから、この小論文をおそらくドイツ語から翻訳されたものと主張している。同書には、各留で行うべき黙想や唱えるべき祈祷の主題も紹介されている。
- ** 昔フランスやベルギーで用いられた長さの単位。現在の 1. 1884 メートル (N. d. S.)。
- (176) C. Sommervogel, *Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*, t.VI, pp. 319-325; t.IX, p. 758, Bruxelles 1890-1900 参照。
- (177) *Op.cit.*, p. 204.
- (178) *Op.cit.*, p. 101.
- (179) *Ibid.*, pp. 65-66 参照。
- (180) *Exercitium amoris Dei pro nobis crucifixi*, Douai 1634; 5^a ed., *ibid.*, 1666 参照。
- (181) *Nouvelle forme de méditations pour tous les jours de l'année*, Paris 1673.
- (182) *Peregrinus Calvariae, sive piae animae exercitationes circa septem praecipua loca et mysteria nostrae redemptionis*, Wien 1638 参照。
- (183) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 122-125 参照。
- (184) *Ibid.*, pp. 126-128 参照。
- (185) *Paradys der wellustichheydt*, Antwerpen 1630 参照。
- (186) K. A. Kneller, *op.cit.*, p. 122, n. 1 を参照。
- (187) *Ibid.*, pp. 88-89.
- (188) *Ibid.*, pp. 99-100 e 101-103.
- (189) *Op.cit.*, pp. 56-60.
- (190) *Ibid.*, pp. 64-65; H. Thurston - A. Boudinhon, *op.cit.*, pp. 95-100 参照。
- (191) K. A. Kneller, *op.cit.*, p. 65.
- (192) *Ibid.*, pp. 65-66.
- (193) “Stimmen aus Maria Laach”, t.LIII, 1897, Heft 8, pp. 336-337 参照。
- (194) Louvain 1568, citato da E. Van Even, *Louvain monumental*, Louvain 1860, pp. 239 ss.
- (195) A. Janssen, *De Kruisweg, Ontstaan en aflaten*, in “Ons Geloof”, t.VII, 1921, pp. 198-199 を参照。
- ** ピエデについては拙訳「十字架の道行き信心の史的概観 (1)」『崇城大学研究紀要』第6号、2012年、62頁参照 (N. d. S.)。
- (196) H. Thurston - A. Boudinhon, *op.cit.*, p. 94 を参照。
- (197) K. A. Kneller, *op.cit.*, p. 72; G. A. Meijer, O. P., *Katholiek Nijmegen*, Nijmegen 1904, p. 64 を参照。
- (198) K. A. Kneller, *op.cit.*, pp. 74 e 77-79.
- (199) *Ibid.*, pp. 82-88.

[図版出典]

図 1 : *Atlante dei Sacri Monti, Calvari e Complessi devozionali europei*, a cura di Amilcare Barbero, Regione Piemonte Parco Naturale e Area Attrezzata

del Sacro Monte di Crea, Ponzano Monferrato, 2001, p. 125.

図 2 : *Ibid.*, p. 124.

図 3 : G. Donnini, 'L'oratorio dei Beati Becchetti. Un' iconografia della passione del primo '400 a Fabriano', in *Di Ritorno dal Pellegrinaggio a Gerusalemme. Riproposizione degli avvenimenti e dei luoghi di Terra Santa nell'immaginario religioso fra XV e XVI secolo*, Atti delle Giornate di Studio 12-13 maggio 2005, Università della Calabria, A cura di A. Barbero e G. Roma, Centro di Documentazione dei Sacri Monti, Calvari e Complessi devozionali europei, Vercelli, 2008, p. 149 (Fig. 5).

図 4 ~ 7、図 11、12 : 訳者撮影

図 8 : *Atlante dei Sacri Monti, ... , op.cit.*, pp. 99-100 掲載の図を加工.

図 9、10 : A. Barbero, 'Il ricordo del Pellegrino e l'esperienza del Sacro', in *Di Ritorno dal Pellegrinaggio a Gerusalemme ... , op.cit.*, p. 80 (Fig. 4, 5).



図1 アダム・クラフト「キリストの7回の転倒」のレリーフ
1505年頃 ニュルンベルク ゲルマン国立博物館蔵（現地に置かれているのは模刻）

図2 ニュルンベルクの「7回の転倒」の留の配列
(*Atlante dei Sacri Monti, Calvari e Complessi devozionali europei* 掲載図)



図3 ファブリアーノ サン・タゴスティーノ聖堂 <涙の聖母> ないしは<ピエタ>の祭壇に配されていた作者不詳の木彫像



図4 ヴァラッロのサクロ・モンテ
下方より仰いだ山上の現在のサクロ・モンテ



図5 ヴァラッロのサクロ・モンテ
現在の神殿の広場



図6 ヴァラッロのサクロ・モンテ
第33堂内の《エッケ・ホモ》の場面
彫刻（1608-09年）：ジョヴァンニ・デンリー
コ、壁画（1609-10年）：モラッツォーネ



図7 ヴァラッロのサクロ・モンテ
第38堂内の《磔刑》の場面
彫刻／壁画（1520-28年）：ガウデンツィ
オ・フェッラーリ

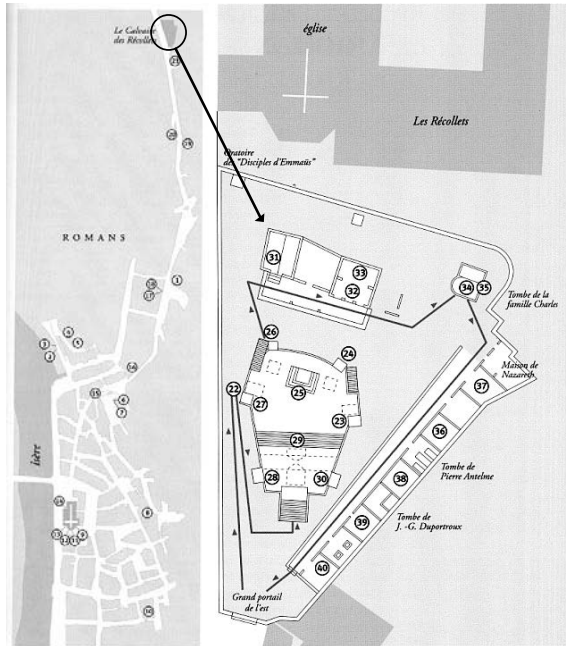


図8 ロマン＝シュール＝イゼール
現在のカルヴァリオの礼拝堂の配列図
(*Atlante dei Sacri Monti, Calvari e Complessi devozionali europei* 掲載の図を加工)

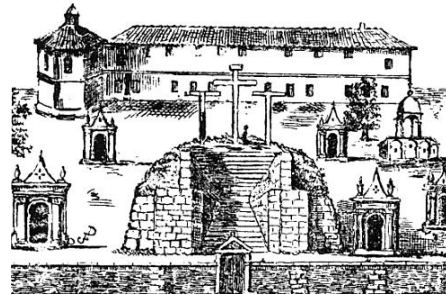


図9 15世紀の古いカルヴァリオ (U.シュヴァリエの研究 (19世紀) で扱われた版画) (上)
図10 現在のカルヴァリオ (図8の⑳に相当) (下)



図11 トブラッハ (ドッビアーコ)
6留からなる十字架の道行きの第1留 (死刑の宣告) の礼拝堂 (左) とミヒャエル・パースによる《死刑宣告》の浮彫り彫刻 (1519年) (右)



図12 トブラッハ (ドッビアーコ)
6留からなる十字架の道行きの最後の留 (聖墳墓) の礼拝堂